特別寄稿

開学30周年を機に思うこと

Thoughts on the occasion of the 30th anniversary of the opening of the university

小　西　敏　雄
Toshio KONISHI
（心理子ども学科子ども専攻）

松山東雲女子大学が開学して30年を迎えた。いまから30年前の記憶を辿ってみた。

入学式の朝、新しい大学本館の新しい会議室で錚々たる教授陣に出逢った。東雲短大からの移籍教員は13名だったと思う。私はその中の1名で専任講師として着任した。短大では情報処理関連科目を担当する秘書科専任講師であった。短大から移籍した教員は、他の大学から来た先生方のために雑用をこなしていった。国公立大学を定年されてから来られた大教授は雑用をすることはなかった、と思う。本当によく働いた。しかし、当時の短大の先生方からは「女子大の先生は学生の世話をしない」と批判された。まさに緩衝材的役割だった。開学時から教務部員としてカリキュラムに関わり、2016年度に教務部長を4年務め、翌年やっと教務部から26年を経て解放された。

私が短大に着任したのは大学院を修了した直後の24歳であった。その時、短大で前学期は『パソコン講座』、後学期は『統計学』の非常勤講師を務めた。翌年4月から助手として採用され、2年後に専任講師になった。その後、短大で7年間働いた。東雲短大では、大学でありながら金曜2限にはホームルームの時間があり、着任1年目からホームルーム担当をした。この時のホーム長の熊田理恵子さんは今年（2022年11月）の大学祭に高校生の娘さんを連れて、大学を見学に来られた。もうすぐ受験だそうで、東雲が候補だった。久々に会えて嬉しかった。ずっとここで頑張っていて良かったと思った。また、卒業生がもうそんな年齢になったのだと思った。当時の担当したクラスは、確か28名だったと思う。休みがちな学生も担当し1年目から退学手続きを行った。思えば私はまだ25歳だった。本当に若かったと思う。

私の専門が数学であったことはある意味でプラスだった。当時の東雲短大では唯一の数学者で、着任当初から当時の植松事務長に大変可愛がっていただいた。時々事務室内の事務長の隣席に座り、数学と哲学のお話をした記憶がある。秘書科で『情報学』を共同で担当し単位認定者であった山上克巳教授は東雲学園の元事務局長で、定年後に教鞭をとられた。この山上先生にも気に入られ、

よく哲学談義を行った。数学はそもそも哲学なので、よく論理的な議論を行い、山上先生に花を持たせていただいた。今から思えば、祖父的存在の方々に本当にお世話になったと感じる。

着任した時は、もちろん最年少教員で皆さん先輩であった。ただパソコンが使える唯一の存在だったので、その点からも重宝された。先輩の宮内秀和先生は私より一回り上の家政科の物理学担当教員で統計学の前任者だった。宮内先生にも大変お世話になった。私は非常勤時代に第1種情報技術者試験に合格していた。数年後宮内先生も同じ試験に合格し、家政科の情報関係の授業をするようになった。

最初に入った研究室は亀岡篤先生と同室であった。今から思えば、あの狭い空間によく2人が居たなと思う。その後、D館が新築されパソコン54台の情報教室が整備された。その5階の情報教室D-5-2、D-5-3の世話番として新しい研究室に移動した。眺めの良く日当たりの良い広い研究室だった。女子大に移籍するまでそこで過ごした。

情報関係を担当していたので図書館員になった。図書館の情報化をすすめ、情報館というブレインテックのシステムを導入した。これが本学図書館のDXの始まりだった。そして図書館職員として働いていた女性を人生の伴侶とした。31歳になった年だった。そして33歳の年に女子大が開学し、長女が8月に誕生した。

女子大に移籍することが決まり、後任が宇都宮昇平先生だった。一つ年上で物理学出身であった。議論してぶつかったこともあった。しかし彼は私を常に先輩として立ててくれた。多分、不満も多かっただろう。しかし最後は主張を受け止めてくれた。最後、急逝してお別れする直前まで、彼は本当に心の友だった。葬儀では涙が止まらなかった。

初代学長の岡本道雄先生は「シリナガビッチギロンスキー（尻長ビッチ議論好き）」という異名を持つ話好きの方だった。なかなか直接にお話を聞くことができなかったが、亡くなる前の年末の忘年会の2次会で、那須野学科長、石丸学科長とともに若手教員とカラオケバーに連れて行っていただいた。そして、皆の前で谷村新司の『昴』を唄った。

目を閉じて何も見えず……、さらば、昴よ。

松山東雲女子大学という生まれたばかりの名も無い大学に全国から集まってきた教員たちが、世間に声を上げようともがいている姿がまさしく目に浮かんだ。岡本先生はさらに前に向かって歩いて行かれた。そして翌年のお正月明けの朝に他界された。あの『昴』は今でも覚えている。岡本学長は今でも心に生きておられる。

学内ネットワークを構築した前には、当時、本学の図書館長をされていた長谷川孝士教授にお願いして情報環境整備検討部会を設置していただき、内線を使用したダイアルアップPPPを始めた。

研究室の電話が通信中で、電話が繋がらないので学内 LAN が構築の検討が始まった。長谷川先生は「国語の権化」と言われる素晴らしい方で、愛媛の国語教育の中心的な存在の方だった。この先生が東雲女子大におられたので学内 LAN ができたと思う。長谷川先生も本学を退官されたのちに他界された。

その後、2 代目の別府惠子学長、そして礒村滋宏学長。私を教務部長にして情報化を進めた棟方信彦学長と出会った。塩崎千枝子学長とは短大時代から入試の作問や、女子大の教務関係で一緒に仕事をさせていただいた。

この 30 年間にお世話になった先生は大半が亡くなられた。本当にいろいろとお世話になったと思う。皆様にこころから感謝したい。目をつぶると、その先生方の思い出が頭を巡る。自分もそんな年齢になったのだなと改めて思う。私もあと少しでここを離れることになる。誰かに覚えていてもらえる存在になれるかなと思う。